

Tarkarahasya における Sambandhaparīkṣā

矢 板 秀 臣

仏教認識論の綱要書 Tarkarahasya (略号 TR) のテキストは 1979 年に P. Shastri によって出版された¹⁾ (このテキストを Sh と略す)。これはラーフラ・サーンクリトヤーヤナ請来 of 写本写真に基づいているが、それは完本ではなく、比量章の途中 (fol. 58b; Sh p. 111) までしか知られない。その後 G. Bühnemann は、TR 写本を参照してこのテキストについていくつかの貴重な指摘を行なった²⁾。その論文の中で彼女は、TR 写本に付されている folio number (Sh では無視された) に従って TR テキストを整理している。その際に彼女が暗示したように、TR 写本写真 (そして Sh) には、fol. no. が明記されてなくそして別の箇所に紛れ込んでいる 2 葉がある³⁾。本発表はこの 2 葉が何であるかを明かし、さらにそれが何を物語るかを述べるものである。

その 2 葉とは、Sh (p. 64, 7-66, 7) の P4A4 と P4B4 (前者を Xa, 後者を Xb と略す) の 1 葉 (X 葉とする)、そして Sh (p. 69, 13-71, 12) の P4B/6/8 と P4A/6/5 (前者を Ya, 後者を Yb と略す) の 1 葉 (Y 葉とする) である。この 2 葉には、G. Bühnemann が指摘したように、fol. no. が付されていない。

筆者は TR 研究の一環としてその「現量の対象」章 (Sh p. 64, 1ff.) を調査した際、Sh p. 64, 7 の中途から始まる Xa が内容的に直前の文に繋らないことに気付いた⁴⁾。そこで Ya (Sh p. 69, 13ff.) も見るとやはり同様である。Ya と Yb では結合 (samyoga) 等の関係 (sambandha) が扱われていることから、そこ (Ya) に法称 (Dharmakīrti) の Sambandhaparīkṣā (SP と略) 最終三偈 vv. 23-25 が見出された⁵⁾。またそれらの前後に SP vv. 22-25 に対する自注 Sambandhaparīkṣā-vṛtti (SPV と略) の断片が多く散在しているのも見出される⁶⁾。Ya 冒頭に SPV ad v. 22 があることは、Ya の前葉には本来 SP v. 22 があったであろうことを予想させる。さらに内容を検討すると、Yb はすぐに Xa に繋ることが明らかになる⁷⁾。以上により Ya-Yb-Xa-Xb という順序が明らかになった。

Ya-Yb-Xa-Xb が内容的に SP に関わることは上述のように明らかであるが、SP vv. 1-3 の引用が見られる Sh p. 111 とは関連があるだろうか。Sh p. 111, 5-8 (=TR 写本 fol. 58b4-5):

「⁸⁾ (問:) 遍充 (vyāpti) は実に関係 (sambandha) である。それ (関係) は汝ら [仏教徒] にとって何を本性とするというのか [、汝らにとっては何の存在価値もないものであろう]。というのは仏教徒によって実体等の句義 (padārtha) 群は排除されているから*。それら [句義群] に含まれる関係 (sambandha) がどうして [汝らによって排されず] 残されるというのか。」 (* 写本により avadhūto と読む)

これに対して SP 偈を引用しつつ答える (Sh p. 111, 9ff.)。SP 第一偈を引いた後、

「世俗的な存在としての [関係] (sāmvṛta) は排せられない」 (Sh 111, 12)

と言う。Sh p. 111, 19 以降 (fol. 59 以降) は写本を欠く。次に Xa を見てみよう:

「故にこのように、依他性 (pāratantrya, cf. SP v. 1)・本質融合 (rūpaśleṣa, cf. SP v. 2)…… (中略) ……などは、真実の関係 (sambandha) ではない。では [仏教の認める関係⁹⁾は] どうか。諸物の無区別の自己本性に関して [知られる] 同一性 (tādātmya) なる関係は世俗的存在 (sāmvṛta) であり、限定的である存在・無存在を考慮して [知られる] 因果関係 (kāryakāraṇabhāva) は世俗的存在である。なぜなら観念 (kalpanā) が全く別個である諸物を融合している [にすぎない]。…… (中略) ……従って¹⁰⁾ 遍充 (vyāpti) なる関係について異解をおこすべきでない。」 (Sh 64, 11-19)

この中で最後の結論は先に Sh p. 111 に見た前主張に対する答えの結論と考えられる。こうして、元々の写本では「Sh p. 111 (=fol. 58b)……Ya-Yb-Xa-Xb」という順番であったろうこと、そして fol. 58b と Ya の間には、SP vv. 4-22 の偈頌とそれに対する TR 作者による注解——SPV の抜粋を含めた——が元来あったろうことが予測される。X・Y両葉は fol. 59 以降欠葉だったうちの2葉であろう¹¹⁾。

以上のように、TR (比量章) には元々 SPV の抜粋をふくめた SP 偈全体とそれに対する注解があったであろうことが推測されるのである。TR 作者が SP 全体を引くのは何故かという点、前に訳出したように、比量説 (論理学) において最も重要な概念である必然的關係すなわち遍充 (vyāpti) が、一種の関係 (sambandha) であり仏教説の認めるところではない、という矛盾を解決するためである。その解決法を見ると (訳出部参照)、SP は、いかなる関係も真実在としては決して認めないが、世俗的・二次的なものとしての関係を全く認めないというのではなくむしろ積極的に認めるのである、というふうに TR は SP を解釈していることになる。TR は、関係を否定する SP を利用し根拠として、却って同一性・因果性なる必然的關係——世俗的存在——の肯定を積極的に証明しようとしてい

る。このような SP 利用・解釈は SP 解釈のための一資料となろう¹²⁾。

最後になったが、ラーフラの撮影した TR 写本写真には結局 fol. no. 31 ; 32 の2葉は含まれてなかった。この2葉はTRの「現量の対象」章(本来 fol. 30b5-33b2 に相当)の中心部分をなすものであった。

- 1) Acharya Paramanandan Shastri, "Tarkarahasya", TSWS no. 20, Patna, 1979.
- 2) G. Bühnemann, "Tarkarahasya and Vādarahasya", WZKS 27, 1983, p. 185-190.
- 3) Cf. G. Bühnemann, op. cit., p. 189, foot-note (**). ラーフラの並べ間違いか、保管されていた状況がそうであったのかは不明。
- 4) Sh 64, 5-7 (=fol. 30b7) : "asādhāraṇena……manovijñāna" が Pramāṇasamuccaya-vṛtti ad I v. 4ab の抜粋断片であり、しかも尻切になっているので容易に判断できる。Cf. M. Hattori, "Dignāga, on Perception" (HOS 47), p. 87.
- 5) 拙稿「Tarkarahasya 研究 (I)」(成田山仏教研究所紀要 12号, 1988), p. 97 参照。
- 6) この SPV 梵文断片は同紀要13号に掲載予定の拙稿に示す。この拙稿には Sh p. 111, 5-19 と Xab, Yab の箇所の和訳を含む。
- 7) 紙数の関係で詳説できないので、上述の拙稿(準備中)中の和訳を参照されたい。
- 8) この直前で遍充の決定が説かれている。但し、写本 fol. no. 53-57 の5葉が欠葉であるので詳しいことは不明である。TR の比量章については別稿を期している。
- 9) 同一性 (tādātmya) と因果性 (tadutpatti) のことである。
- 10) 写本により tan na と読む。(Sh は tatra)
- 11) XYの両葉は TR の一部であると考えられる。但し両葉に fol. no. が付されていないので疑問の余地は残る。XY両葉の大きさ、書体、行数は他と全く同じである。
また TR 写本 fol. 58b (SP vv. 1-3 を含む) と Ya (初めに SPV [ad v. 22] と SP vv. 23-25 を含む) とは内容的に直接繋らないから、その間に一葉以上の介在を認めねばならない。従ってこの間の欠葉中に vv. 4-22 とその注解があったと考えるのは無理ではない。
- 12) Th. Stcherbatsky, Buddhist Logic, I, p. 245-8 参照(他にも勝れた研究があるが記す紙数がない)。ジャイナ教の論書 Prameyakamalamārtanda (K. Shastri ed., Bombay, 1941), p. 504, 20ff. と Syādvādaratnākara (M. Ladhaji ed., repr.-Delhi, 1988), p. 812, 8ff. には共に、SP vv. 1-22 を引く仏教説が前主張として見られることはよく知られている。そこでは SP を根拠として、関係 (sambandha) が存しないから極微の結合もありえず、従って大きさをもって見える外界物は実は真実のものではない、と主張している。Śāṅkaranandana も注釈するに際し、SP は外界非実在を説くもののだといっている(デルゲ版 No. 4237, 22a2ff.)。

<キーワード> Tarkarahasya, Sambandhaparīkṣā.

(成田山仏教研究所研究助手)